

ヒーローは名探偵の夢
を見るか？

ナマクラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全ての物には役割が備わっている。その役割が何なのかを知るために人は生きるのだ。

そう考えた少年は自らの役割が何かを考え、ヒーローを目指すことにした。
ヒーローとして彼は名乗りを上げる。

「俺の名前は蔵井戸——名探偵だ」

目次

O t h e r	F r o n t
s i d e	s i d e
32	1

Front side

目が覚めると、そこは知らない場所だった。

「……は、どこだ……？」

周囲を見渡してみる。

俺が立っている場所は大小様々なコンクリートの塊が積まれて足場になっていて、おそらくそれは円形に積まれていて、その高さは俺の視界からは地平線まで地面が見えない事から相当地に高い事がわかる。おそらく円形の塔のようにこの瓦礫は積み上げられているのだろう。足を踏み外せば即死するか瓦礫にぶつかって転がり落ちるかのどちらかになりそうだが、幸いというべきかこの瓦礫の塔は直系が大体20メートル程はありそうなので無理に走ったりしなければ足を踏み外す事もないだろう。

……ここまで観察してみたが、やはり見覚えがない。何で俺はここにいます？ いや、

そもそも俺は誰だ……？ ちょっと待て、自分の名前も、記憶も思い出せない……!?

この場所の事も、自分の事すら思い出せない。そんな異常事態にも関わらず、俺は不思議ととも落ち着いていて、冷静に周囲を観察していた。

瓦礫でできた円柱の外側は地平線まで青空で広がっているが、円の中心部分もまた瓦

礫のない空間が広がっているらしく、俺は何気なくその穴を覗いてみた。穴は予想外にもそこまで深くなく、穴の底が瓦礫が一つも落ちていない芝生の生えた空間である事はつきりとわかった。

そして、その穴の底にいたのは、胸から血を流して横たわる一人の少女の死体だった。

「——カエルちゃん……」

芝生を血で赤く汚しながら力なく倒れている彼女の姿を見て俺の口から自然とその名前が零れた。

……そうだ。俺は彼女の事を知らないが、彼女の名前は知っている。彼女は『カエルちゃん』だ。

そして彼女の姿を見て、彼女の事を思い出した事で、俺は俺の事を理解する。

俺の名前は『蔵井戸』。名探偵だ。

そして、彼女の死の謎を解く事が俺の使命だ——

そう理解した瞬間、かすかに何か音が鳴ったかと思えば、先程まで俺以外誰もいなかった瓦礫の塔の上に、いきなり人が何人か現れた。

「はっ？ 何だ？ ここどこだよ……」

「アンタ、ここがどこだか知ってるか？」

「いや……俺もわからない」

そう返答しながらも彼らを観察していたが、その姿や声は安定していない。常に変化し続けているのだ。

身長、顔立ち、声質、年齢、果ては性別まで、変化し続けてその特徴を掴ませてくれない。

一言で表すのならば彼らはこの世界にとって『誰でもない』のかもしれない。そんな事を考えていると俺たちのいる場所に影が覆った。

「はっ……っ？」

何かと思つて上を見ると、そこには足元にあるようなコンクリート、それも俺くらいなら容易に押し潰せる程にデカイ塊が迫っていて――

「——アアアアアアアツ……………!? ………………ああつ?」

……………そして、全身をグシャグシャに押し潰される常識外の痛みと筆舌に尽くしがたい喪失感に苛まれながら、彼は布団の中から飛び起きた。

「……………ああああ……………そうか、夢か……………今日はこつちか……………」

跡形もなく潰された四肢や胴体が無事な事を潰された自身の無事なその手で確認しながら、荒くなった息を整えるように細く長く呼吸を繰り返していく。

「今回の死因は圧死。上空から落ちてきたコンクリート、多分ビルの破片か? だがカエルちゃんの死因はおそらく刺殺、少なくとも圧死じゃなかった……………という事は……………」

そして、いつものように先程までの夢での出来事を分析し始める。
「さて……………謎が解けるまで今日は何回死ぬのかね」

そう言つて彼は何事もなかったかのように再び眠りに落ちた——



水波吞 ミズハノメ 春人 ハルト。

悪意を読み取る個性を持つ警察官の父と、人に意思を伝える個性を持つ主婦の母の間

に生まれた彼は、至って平凡な日常を送っていた。

人類の八割が個性と呼ばれる特異能力を持って生まれる超常社会において、彼もその例から外れず物心がついた頃にある個性に目覚めた。

——それが、平凡な彼の終焉だった。

それは、ある夜の事だった。

いつもと同じように眠りに落ちた彼は、普段とは違う夢を見た。

その夢の世界は現実と瓜二つだった、彼自身現実と変わらない姿をしていて、身体感覚だつて変わらないし、現実と区別をつけるのも難しいくらいだった。

違うのは自分以外の人間が顔や姿の見分けもつかない人影になっているくらいだった。

その人影は彼を認識しない。それぞれが誰かの生活をなぞるかのよう動き続けている。

いつもの日常のようで明らかに違うその夢の世界に彼の中から恐怖が湧き上がった。

そんな現実と見紛う夢の中で、他の人影とは違う、けれど見知らぬ誰かがやってきた。

彼以外の人影ではない誰か。それを夢の中で見つけた彼は、その誰かに駆け寄り、その最中に誰かの手の中に握られていた拳銃が彼に向けられ、銃声が鳴り響いた。

……頭部を撃たれての即死だった。

頭部の痛み、真つ赤に染まった視界、突拍子もない混乱、冷たくなつていく身体、それらすべてを塗りつぶすかのような喪失感。

それらが、目を覚ました彼に襲い掛かった。

叫び声をあげていたのだろう、心配した母親が駆け寄ってきた。

『怖い夢を見たのね……』母はそう言つて彼を抱きしめた。個性を使ったのか彼の脳内に慈愛に満ちた母の声が響き渡り、少し落ち着く。

泣きながら母に今の怖かった夢の事を話す彼を、母は優しい笑みを浮かべながら聞いてくれた。

——ああ、よかった。あれはただの夢だったんだ。

そうして落ち着いた彼は母の温もりを感じながら再び眠りに落ちて——

—— 気付けば先程いた世界に立っていた。

現実と変わらぬ質感、変わらぬ自身。違うのは先程まで感じていた母の温もりがなくなつた事と誰かもわからぬ人影がいる事。

それだけであの怖い世界に再び放り込まれたのだと理解できた。

—— 彼が目覚めた個性、それは『現実のような夢の世界で誰かに殺される』個性だつた。

それから、彼は眠るたびに自身の個性によつてこの地獄のような夢の世界に放り出さ

れ、あらゆる方法で殺され続ける事になる。

八回目の死は、刃物で滅多刺しにされた。

十五回目の死は、四肢を切断されてそのまま放置された。

三十七回目の死は、顔の皮を剥がれた。

六十二回目の死は、空間ごと振じり切られた。

百を超えてからは数えるのを辞めた。それでも誰かが殺しにきた。

ある時はひたすらに殴り殺され。

ある時は全身を焼き殺され。

ある時は酸か何かで融かし殺され。

ある時は身体を削ぎ殺され。

ある時は臓器を抉り殺された。

彼は逃げた。時に隠れて見つからないように逃げ、時に形振り構わずひたすらに逃げた。その最中で誰かに、ヒーローに助けを求めた。

世間一般の子どもと同様に彼もヒーローに憧れていた。どんなヴィランがいてもヒーローが助けてくれるはずだと思っていた。そんなヒーローがカッコイイと思って

いた。

こんな訳のわからない状況でも、こんな絶望的な状況でも、きつとヒーローが助けに来てくれると信じていた。

——だが、来なかった。

仕方のないことだろう。誰が行き方もわからない夢の世界にまで助けに来れるというのか。しかし彼の中で幼いながらも築き上げられたヒーローへの憧れ・希望は自身が殺されると共に徐々に崩れていき、もはや無きに等しかった。

そんなある日、たまたまものすごく有名なヒーローと出会い、話ができた。

「どうしたんだい少年、暗い顔をして。何か困りごとかな？」

「……言ってもどうしようもないよ」

「そうとは限らないさ。これでも私はスゴイヒーローなんだぜ。言ってみるだけ言ってみるといいさー」

「……夢の中で、いつも怖い人が俺を殺してくるんだ……何とかしてよ」

「あ、夢の話か……うーん私はそういう精神的な問題はちよつとなあ……」

「やっぱり無理じゃないか……」

「あー……いいや、大丈夫!! 何故つて? 私が行くからさ!! どうしても耐えられな

いのならばその夢の中で私を呼ぶといい!! どこだろうときっと駆けつけてみせようじゃないか!!」

そうして夢の中でヒーローの名を呼び……………彼は救われた。



『——この痛ましい事故の原因が一刻も早く究明される事を——』

テレビから流れてくるニュースの声にふとトーストを齧っていた春人の意識がそちらに向いた。

「……………ああ、今回の夢はこれか。事件とも発覚してないんだな」

世間的に事故としてニュースに取り上げられてはいるが、春人はそれを事故ではなく人為的な事件であると確信していた。

昨夜見た夢がこのニュースで取り上げられている事故——事件の犯人の殺意によつて形成されたものだとして理解できた。

夢の中でその殺意の世界に潜り込み、どのような人物がどのような意思で行なったかすら解き明かしていたが、それを誰かに伝えることはない。無断使用した個性による証

言は証拠能力を持たないし、言った所で誰も信じないからだ。

できると思つた事ならするが、必要のない事をわざわざやるつもりはなかつた。

「……まあいいか。謎解きは中々に楽しめたし、新たな挑戦への試金石としてはいい結果だつた」

どうせすぐに警察が事件だと理解するだろうと、対岸の火事を眺める事から自身の直近の試練に集中することにした彼はマグカップに入ったコーヒーを口にした。

砂糖もミルクも入っていないブラックコーヒーは、その値段相応の味わいを春人に与える。

「……………うん、不味い」

とにかく苦かつた。安物のインスタントコーヒーの粉とお湯を適当に入れて混ぜただけの物だから当然といえば当然である。

元々幼い頃から眠気覚ましに飲んでいた故に味は度外視だったが、今ではこの苦味にすっかり慣れてしまつていた。

とはいえ別に好きな味というわけでもないので水で口直しをしてから、彼は真新しい制服を身に纏つた。

「さて、今日も死なないように頑張ろうか」

今日は、彼が雄英高校ヒーロー科への受験日当日だつた。



絶望でしかなかった悪夢から解放された。

とはいえ憧憬が崩れ去ったヒーローへの不信感はぬぐえないし、かといって殺しに来るヴィランの印象が底辺に位置するのは変わりなかった。

頼れるモノがないのなら、自分で何とかしなければならぬ。

長い間一人で殺人鬼に殺され続けてきた彼の中にはそういった考えが生まれていた。身体を鍛え、知識を蓄え、技術を磨く。

ストイックに自己研鑽を続ける彼の姿は周囲から見ると少しおかしく見えた。

当然周囲の人間からどうしてそこまでするのかと尋ねられることもあり、彼が「ヴィランに襲われた時のために」と答えると、周囲の人間は「そんなもの事を考えても……」と呆れていた。

しかし、彼にとってそれは『もしも』の事ではなく、常日頃の事で死活問題だった。

周囲との間にズレが生じ始めている事に彼自身気付いていたが、どうするつもりもなかった。



最悪だ……！

昔から、ヴィラン向きの個性だと言われ続けてきた。

それに対して、曖昧に笑みを浮かべるばかりで否定する事ができなかった。

それでも、憧れを、ヒーローになるという夢を諦めきれなかった。

だからこそ、厳しいとわかっていても、ダメ元でも憧れの雄英高校ヒーロー科を受験したんだ。

だけど、やっぱり現実はそこまで甘くなく、実技の試験内容は俺にとって最悪で……
「くそっ………よりもよって、何で……っ！」

夢に向かつて進むために行動を起こしたのに、実技試験の真つ最中である今、俺はただ逃げるために足を動かしていた。

実技試験というくらいだからヒーローとしての技能——ヴィランに相対するための能力があるかを見るためのものだっていうのは予想できた。あの雄英ならばヴィランとの実戦を想定した状況を用意してもおかしくないとも思っていた。

その仮想ヴィランが人間なら問題はなかった。試験内容や立ち回り次第ではあるけども俺でも受かる可能性があっただろう。

けど、今回のヴィランは――

『――標的発見!!』

「なっ!?!」

路地の先から俺の前に現れた仮想ヴィランは動く鉄の塊――ロボットだった。

普通の人じゃこんな鉄でできたロボットを倒すなんてできやしない。だから学校側としては個性を使って何とかしろって言いたいんだろう。でも俺の個性じゃどうしようもない。

こんな個性じゃなかったら……何度そう思ったかわからない考えが再び頭に浮かんでしまい、ロボットの動きから注意が逸れてしまった。

『人間ブツ殺ス!!』

「……ッ!?! しまっ――!?!」

こんな……『洗脳』なんて個性、ロボット相手には使えないじゃないか――

「――おつと失敬」

目の前に迫った鋼鉄ヴィランの脅威ロボの首元に、そんな緊張感のない声とともにボールが突き刺さっていた。

『ガガッ!? ギギッギギッ!?』

「よ…………つと!!」

そしてビキビキと何かが押し折れるかのような鈍い音と共にその首が千切れ、そして頭部の落ちた身体はズズン、と地面にひれ伏した。

「大丈夫か?」

「っ……………!」

ロボットを容易く屠った事を何でもなかったかのようにこちらに手を差し出してくるソイツに、どうしようもない劣等感が湧き上がってきてしまう。

気付けば、差し出された手を払いのけてしまっていた。

「……………いいよな。増強系か知らないけど、アンタもヒーロー向きの個性持ちなんだろ」

「……………」

「俺みたいなヒーロー向きの個性を持ってない奴の気持ちなんてわからないだろうな」

……………我ながら、最悪だ。助けてもらったのに、こんな悪態ついて礼の一つも言えないなんて……………

だけど、止められなかった。

憧れは所詮憧れでしかなく、自身の無力さを噛み締めている目の前で俺が欲している力を揮う男に劣等感と嫉妬がどうしようもなく湧き上がる。

所詮は負け犬の遠吠えに過ぎないが、この俺の悪態に対して目の前の男がどうどう返してくるのか……最悪殴られても仕方ないとも思っていたが、その動きに意識が向く。コイツは、どう反応する……？

「——お前、観察力が足りないな」

返されたのは、そんな言葉だった。

「……………はっ?」

何故ここで俺の観察力の話になるのか。意味がわからなかった。

怒らないのか? 無視しないのか? 嘲笑わないのか? 心配しないのか?

「推察するに、お前の個性は……精神干渉……それも『洗脳』あたりか」

「なっ……!!? 何で……!!?」

「顔に書いてある」

「そんなわけないだろ!!」

真顔でそんな子供でも分かる嘘、というか冗談を言ってくる男に言い返すと、男は軽

く息を吐くと、何でもない事のように説明してきた。

「少し考えればわかる事さ。見たところお前はまだロボを倒せていない。さっきの様子を見るに戦闘慣れやケンカ慣れをしている様子もなく、また個性を重視している発言から戦闘系の個性持ちでもないんだろう。手ぶらな所を見るに創造系でも転移系でも収納系でもなく、さらに今回の試験内容から考えてロボに干渉できる個性でもない事から人間の精神に働きかける個性であると考えられる」

「さらにお前は俺の事をヒーロー向きの個性だろうと指摘した。つまりお前は自分の個性をヒーロー向きじゃない、あるいは逆であると考えている。精神系の個性でそういった誹りを受けやすい個性と考えて、結論を出した。それだけだ」

「……………っ！」

たった、それだけの事で、この一瞬の間に俺の個性を当てやがったのか……!?

普通そこまで頭回らないだろう？ この一瞬でそこまで考えられないだろ？ これで個性もヒーロー向けだとか、不公平だ——

「ちなみにだが、俺の個性は、精神系の一種だ。この試験じゃ何の役にも立たない」

「え…………？」

……………今、コイツ、何て言った…………？ コイツの個性が精神系…………？ 肉体増強系でも

攻撃系でもなく、精神系の個性だって言ったのか…………!?

「う、嘘を吐くなよ！ 肉体面が無個性と変わらないんなら、一体どうやってロボットを倒したっていうんだよ!？」

信じられなかった。個性が意味をなさないならどうやってさつきロボットを倒したって言うんだ。「目の前で見てただろうに……」と少し呆れながらもソイツは説明してくれた。

「いくら戦闘向けの個性に有利な試験とはいえ、殆ど暴力ありありのケンカもしたことない奴らが殆どだろう。そんな奴らに個性がないと倒せない相手を倒せなんて試験いくらなんでも理不尽すぎる。だから素人にもちゃんと倒せるように細工はされてるのさ。ちゃんと観ればわかるけどわざわざ弱点作ったりな。武器だって……」

そういつてソイツは手に持ったバールでロボットの残骸を漁ってロボットに内臓さ
れていただろう金属棒を取り出した。

「こんな感じでそこから中にあるわけだしな」

「……………っ」

言葉が、出なかった。ヒーローが個性を使わずに敵を制圧するなんて、今まで考えた事もなかった。

ヒーローといえば個性といってもいい程、個性はヒーローにとつての武器であり象徴だ。まずは個性ありきで考えるだろう。

だからこそ俺は自分の個性がヒーロー向きじゃない事にハンデを感じているし、事実今まさにどうしようもない状況に陥っていた。

けど、目の前のコイツは個性なんてなくなつたつてヒーローはやっていけると、その行動をもつて示していたのだ。

それに比べて俺はどうだ？ どうせヒーローなんて無理だつて思つてた。俺自身が一番思つていた。だから相手がロボットだつてわかつて、もう心のどこかで諦めてたんだ。こんな俺がヒーローになろうだなんて、笑い種だ……。

「ほら」

「え……？」

自己嫌悪に陥る俺に、目の前のコイツはさつきロボから掘り出していた鉄の棒を俺に差し出していた。

「時間はまだある。これやるから頑張れよ」

「で、でも……俺じゃポイントは、稼げない」

そうだ。心のどこかで諦めてた俺じゃ、どうしようもない……。そもそも俺じゃ、この試験を突破できない……

「考えるのをやめるなよ」

……そんな俺の自己否定を、ソイツの一言が止めた。

「お前の力で倒せないなら、どうやったら倒せる？ 何があれば、どんなものがあれば、どうやれば……それを考え続ける。手札にないなら探せばいい。ヒントはそこら中にあふれている」

「考え、続ける……」

「諦めなければ夢は叶う、なんて言わないけどさ。すぐに諦めてたら出来る事もやれないぜ」

「——」
そう言つてこの場を離れていくアイツの背中を見ながら、俺はその言葉を噛み締めていた。

俺は、ずっと悩んできた。『洗脳』という敵向きの個性を持って、そう言われ続けて、それでも、そんな俺でもヒーローになれないかと悩んできた。決してすぐに諦めていたわけじゃない。

そして今回、ダメ元で雄英のヒーロー科を受験した。

ダメ元……それは、半ば諦めていたんじゃないのか？ でも、諦めきれなかったから、今回受験したんじゃないのか？

俺は、今回、何のために受験したのか。自分の中で、再び問い掛ける。

——俺は、夢を諦めたいのか？ それとも、本気でヒーローになりたいのか？

……答えは驚くくらいにあっさり出た。

——俺は、ヒーローになりたい。

そうだ。俺はヒーローになりたいから、ヒーロー科を受験したんだ。それは絶対に諦めたいから受けたわけじゃない。

答えが出た。なら、あとは行動に移すだけ。そのために何が必要か、考え続ける。

それが、俺を助けてくれたアイツヒーローが教えてくれた事だから——

心操人使—— 雄英高校・実技試験結果、ヴァランポイント：2点



ある日、何が切つ掛けだったのかはわからないが、今までとは違う夢を見るようになった。

その夢の中では、彼は彼自身の記憶を忘れていて、ただの一般人である彼が『名探偵・蔵井戸』になつていて、『カエルちゃん』という謎の女子の死の謎を解く事を目的に行動していく。

推理力というべき頭の閃きは普段以上に冴えているような気がして、身体は普段の感覚で普段以上の動きが可能で、さらに世界は現実やいつもの夢と比べても明らかに歪んでいた。

いくつもの『カエルちゃん』の死の謎を解く毎に理解していく。

いつもの夢が彼の認識する彼の心の世界だとすれば、あの夢はきつと誰かが認識する誰かの殺意の世界なのだ。

このいつもと違う夢を見るようになった事によって、彼の観察し読み解く力が飛躍的に向上し、さらに名探偵の時に出来る動きを参考に自身の動きをも改良していった。

そうしてできる事が増えて行き、気になった様々な事に挑戦していく。

この経験から彼は『できると思つたらやる』という座右の銘を持つ事になった。



水波吞春人。

彼は僕、緑谷出久と同じく雄英高校ヒーロー科1—Aに在籍している一人である。

全国から選りすぐられたヒーロー志望の人間が集まったというだけあつて二重の意味で個性が濃いこのクラスにおいて彼は他の皆とは違う意味で目立っていた。

目立っているといっても目立ちたがりだったり問題児というわけではない。どうい
えばいいのか……特別何か問題を起こすとか自ら主張するとかじゃなくて、むしろ落ち
着きがあるというか……どこか浮世離れしているというか達観しているというか、それ
が逆に特徴として浮き出ているというか……表現するのが難しいけど、僕も含めた他の
皆が持っているヒーローに対する貪欲さというものが感じられない。

そして僕は、そんな個性的な彼の個性を見せた場面を見た事がない。

入学してすぐの個性を使った身体測定の時も、ヒーロー学とかの授業でも、雄英体育
祭の時も、ヴィラン連合が襲ってきた時でさえ個性を使っていなかった。

僕が見ていない場面——例えば僕が怪我をして保健室にいつている間とかに使っていたのかもしれないと思って他のクラスメイトにも聞いてみたけど、誰も水波吞君の個性を見た人はいなかった。

それは本戦まで進出していた雄英体育祭でも同様だ。

頑なまでに個性を使わない水波吞君だけど、いくら戦闘向けの個性じゃないとしてもここまで使わないのは明らかにおかしい。

もしかして使わないんじゃないやなくて使えないんじゃないか……？

もしかして彼は無個性なんじゃ——

「——何か悩み事か、緑谷」

「——ッ!? み、水波吞君!?!」

そんな事を考えていたら、その当の本人から声を掛けられて驚いてしまった。すごいタイミングだ。

「あ、いや、ちよつと、大した事じゃないんだけど、その、考え事してて……」

「ふーん……もしかして俺の個性が何なのかって考えてた?」

「えっ!?! ど、どうしてわかったの!?!」

「顔に書いてある」

「えっ!？」

それが例えだとわかっていながらも思わず手で顔を触れてしまった。

「正確には推測した。緑谷は他人の個性に過敏というか、気にしているように見えるかな」

「えっ!? そ、そんなに僕、個性を気にしているように見えるかな!？」

「ああ。いつそ個性に対してコンプレックスがあるようにも見えるぜ。それはもう――

――無個性のヤツみたいに」

「――!」

すごい観察力と推察力だなと感心した彼の推測は、僕が隠さなければならない部分的に突いてきた。

僕の個性の秘密は、誰にも知られてはいけない。もし誰かに知られてしまったら、僕を信じて託してくれたオールマイトに対して顔向けができなくなる……!」

「え……えっと、その、なんというか……」

だけど、言葉が出てこない。隠し事への心苦しきがあるのもそうだけど、普通にどう返していいのかわからない……!!

「確か、個性の発現が大分遅かったんだっけか。爆豪も言ってたな」

「あ、うん、そう！　そうなんだ！　だから無個性として過ごしてきた時間が長くて！」

何だか水波吞君の言葉に乗った形にはなったけど、何とか言葉が出てきた。これで一応誤魔化した……んだよね……？

でもこのまま話が終わるのも変に記憶に残りそうでマズイ気がするし、とりあえず何か話題を変えよう。何か自然に僕の個性の話から変えられそうな話題は……

「そ、そうだ！　それで気になってたんだけど、実際に水波吞君の個性ってなんなの？」

「俺の個性？」

元々僕が水波吞君の個性について考えていた事を見抜かれた話だったんだから、また戻せばいいんだ！　彼の個性が何なのか気になってたし、それも本人に聞けば解決する！

「そうだな……一言で説明するのは難しいんだが……。突発的な『テレパス』だったり特殊な『悪意感知』とか色々混ぜてるし」

「つまり、精神干渉系の個性って事？」

「まあ、そう。でも一番の特徴を言うなら『特殊な夢を見る個性』だ」

「特殊な夢……？　予知夢とか？」

「予知ではないけど、まあそんな感じ。俺は自分の個性を『I D』^{イド}って呼んでる」

「い、イドド？」

どうしてそこでイドという単語が出てくるんだろうか？ 井戸？ 緯度？

「……でもなるほど。だから個性を使っている所を見なかったのか。確かに体育祭もU S Jの時でも使い所がないし、使ったとしても傍目からはわからなかったんだ。というか『特殊な夢』に『テレパス』、あと『悪意感知』とか色々あるってつまり複合系の個性なのか？ しかも全部精神干渉系の個性だから個性を使っている場面がなかったのか。いや、『夢を見る個性』は精神干渉のカテゴリーに入れていいのか？」

「緑谷、ブツブツ怖い」

「あつ、ご、ごめん」

それにしても、精神干渉系の個性でヒーローを目指すというのもスゴイ話だ。もちろんヒーローの中にはそういう精神関係の個性を持つ人もいるけど、どうしても見栄えがしなかったりヴィランに対する対抗手段としてはいまいちだったりで、戦闘系個性と比べると少数派だ。何せ、それ以外は無個性の人となら変わりないのだから、どうしてもハードルは上がってしまう。

そんな個性を持つ彼が、雄英のヒーロー科に入学できて、さらに体育祭でも結果を出すくらいの実力を身に付けるには並々ならぬ努力が必要だったはずだ。

だから僕は彼がヒーローになろうとした理由も知りたくなかった。

「……水波吞君はどうしてヒーローになろうって思ったの？ やっぱり憧れから？」

「いや別に。そもそもヒーローになりたいわけじゃないさ。憧れも特にないし」

「えっ!？」

ヒーローになりたいわけじゃないって、どういう事……!? それなら何で雄英のヒーロー科に入ったのか、わからない……!

「俺の個性って、日常だと突発的にイメージを送りつけるくらいで実質無個性とそんなに変わらないわけだが、ちよつと疑問に思ったんだよ。俺と実際にヒーローやってるやつらってどう違うんだって」

「どう違うかって……?」

彼の個性は聞いた話通りなら精神干渉系の個性だ。

ヒーローの中にはそういった精神系の個性持ちもいないわけじゃない。とはいえ多くのヒーローの個性は戦闘に應用できる個性が多い。そんなヒーローとどう違うと言われても……大分違うと思うんだけど……疑問に思う事なのか？

何を疑問に思うのかわからない僕の心情を読み取ったのか、水波吞君はこちらを窺いながら続きを話してくれる。

「……ヒーローにはそれ向きの個性がある？ 向いてない個性でもやれることはやれるし、それ向きだろうとやれてない奴はやれてない。人を助けられる？ 助けるだけなら

ヒーローじゃなくてもできる。そもそもヒーローだからって絶対に誰かを救えるわけじゃない。そもそもヴィランなんだといつても所詮は犯罪者だ。わざわざ治安維持組織としてある警察の他に特例を作る必要性はない。当時は必要だったのかもだが、今からでも改めて警察に組み込めばいいだけの話だ」

「ね、ねえ水波吞君……話、逸れてきてない？」

「おっと失敬。で、まあそんな風に疑問に思っ、考えて、考えていつて……結論が出た」
「け、結論？」

「極端に言えば、なろうと思えばヒーローなんて誰にでもなれる。だったら俺でもできると思った。だからやろうと思った。それだけさ」

——それは、僕の中にはない考え方だった。

「それだけで、ヒーローになろうと……?!? しかも、最高峰の雄英に入つて……?!?」
「せっかくやるんなら一番難しい所でやろうって思っただけさ。できると思っただけな」

ヒーローに憧れ、ヒーローになりたいと願ひ、無個性だと発覚した。

親はもちろん周りの皆から無理だと言われて、それでもヒーローの夢を諦めきれなかった———だけど誰かに背を押してもらえるまでヒーローになるための一步を踏

み出せなかった。

僕にとつて『ヒーロー』は特別な存在だ。憧れで、夢で、手の届かない……届かなかった存在だ。

だけど彼にとつての『ヒーロー』は違うのだろう。普遍的で、単なる職業で、選択肢の一つに過ぎない。

おそらくだけど、世間的に一般的な考え方なのは僕の方だ。普通の人はヒーローをそんな誰でもなれる存在だなんて思っていない。はつきりいつてこの感性は独特すぎると思う。

だけど——

『できると思ったからやった』

そう当たり前のように口にして、それを実行した彼を、僕はスゴイと思った。

「で、そういう緑谷はど何でヒーローになろうと思ったんだ？」

「え!?! ぼ、僕?!? 僕は、その……子供の頃からオールマイトに憧れてて——」

……少し独特な水波呑君でわからない事も多いけれど、少し距離が近付いた気がし

た。

……と、ここでもう一つ気になっていた事を思い出したから聞いてみた。

「そういえば水波吞君のヒーローネームってどういう由来なの？ 何というか、ヒーローっぽくないというか……」

カッチャンみたいな殺伐としたセンスの名前じゃないんだけど、でもヒーローとして名乗る名前としては少しおかしいというか……明らかに違う職業名が入ってるし……。

「あれは、そうだな……ある種の理想、かな。現実でもあなれたらっていう願いと、戒めって所かな」

「理想……？」

——これは、ヒーローの卵『名探偵・蔵井戸』が本当のヒーローになるための物

語——

Other side

「局長。やはり、今回の被疑者ヴィランの悪意にもヤツのイメージを見ました」

「また、『ジョン・ウオーカー』ですか……」

個性によって得た情報は証拠足りえない。特に精神系の個性は顕著である。それは警察でも変わらない。

しかし個性によって得た情報から仮説を立てて推理・捜査の糸口にする事は黙認されている。

捜査官・水波吞ミズハノメ 和久カズヒサの持つ個性『悪意感知』もそのように利用されていた。

和久は今までも容疑者あるいはその関係者への取り調べの際に個性を用いて、様々な事件の全容解明、あるいは解決へと道筋を立ててきた。

だが最近になって、捕まえたヴィランの悪意、その根底にある共通の人物像を多く見るようになった。

顔や声など個人を特定するための情報は判別できないが、ソイツは服装や頭に被せた

シルクハット、さらに手に持つステッキと、紳士のような格好が印象に残る人物だった。ここまで明確なイメージが読み取れるという事は、それだけその悪意にこの紳士然とした人物が関係しているという事だと今までの経験から推測するのは難くない。故にそのイメージを悪意から検知できたヴィランたちにその人物について問い掛けるも、彼らはその人物を知らないようだった。その返答にこちらを騙そうとする悪意は感じられない以上、嘘は言っていないのだろう。

あれほどまでに明確なイメージが悪意の根底に存在していた人物を、彼ら本人は全く認識していない……それが一体何を意味しているのかは現時点では不明ではある。

しかし本当にその人物が存在して、ヴィランたちに関わっていたと仮定すると、それはつまりヴィラン、それも連続殺人鬼を生み出している危険人物がこの社会に潜んでいる可能性があるという事になる。

悪意の底にある残滓以外、何一つとして糸口を掴めていないこの謎の存在を、警察は『ジョン・ウォーカー』と仮称していた。

もちろん現時点ではその存在を明確に示唆する証拠はない。現状、和久の個性でしかその痕跡を見つけられていないのだから当然の事である。そもそも彼の今までの功績や信用がなければ虚言妄言として処理されていただろう事案だ。

悪意の中に『ジョン・ウォーカー』の存在が確認された被疑者の共通点を洗い出して

はみたが、『ジョン・ウオーカー』に繋がるような点はいまだに見つけられていない。

「今回も共通点らしきものは見つかりませんでした……今までのヴィランとも接点がない」

「そうですか……現状、証拠らしい証拠がないので表立つての調査はできませんが、ジョン・ウオーカーの痕跡があれば報告をお願いします」

「了解しました。必ずヤツの証拠を探し出してみせます」

「とはいえ少しくらい息を抜く事も必要ですよ……そういえば、水波吞君の息子さんつてもう高校でしたか？」

「はい。雄英のヒーロー科に進学する事になりました」

「雄英のヒーロー科！　すごいですね！　親の背を見て子は育つといいますが、正義を志す辺りやはり君の影響を受けているようですね」

「……どうでしょう。私は、少なくともいい親ではありませんでしたから……」

「何を言っているんですか。奥さんが亡くなってから片親で子供を育て上げたのにいい親じゃないわけじゃないですか」

「いえ、私は仕事にかまけてほとんど構ってやれませんでした」

「そう自分を卑下しないでください。この仕事柄仕方ない事でしょう」

「仕方ないとはいえ、それを言い訳にするのは我ながらどうかと思いますし」

「真面目ですわねえ……では、これからも息子さんが安心して暮らせる世の中にする事、それが君が親として出来る事だと思いましよう」

「そう、ですね。せめて、アイツが安全に暮らせるよう、一人でも犯人を捕まえないと……」

そのために、まずはこの『ジョン・ウオーカー』の正体を突き止めてみせる。和久はそう決意した。



彼の母親の死因は不明だった。外傷は一切なく、心不全だと診断された。

しかし彼女の死に顔は、とても苦痛に満ちたものであった。

……それは、事故だった。誰が悪いわけでもない、いくつかの要素がかみ合ってしまったが故の事故だ。

彼は他者に自身のイメージを送り込める個性の持ち主だが、個性の発動自体が不安定な状態で送り込むイメージとそのタイミングをコントロールができなかった。

彼の母親は他者とイメージをやり取りできる個性で、その個性故か感受性が高く、他者からのイメージを正確に受け取りやすい体質だった。

この当然の個性の相性の良さが、悲劇の要因となつてしまった。

彼が突発的に思い浮かべてしまったのは『死』のイメージだ。ただし、有り得ないほどに事細かで現実感溢れる死のイメージだった。

その痛み、その恐怖、その喪失感。まるで何度も何度も体験してきたかのような濃厚なイメージ。

それが、突発的に個性によつて送り込まれた。

そして、そのイメージを送り込まれた母親は、そのイメージを寸分違わず体感してしまった。

あまりにもリアルすぎる死のイメージ。そのイメージを突発的に発信してしまう未熟な個性。そしてそれをより正確に受け取つてしまえる体質。

それらがかみ合った結果、彼の母親は彼から送り込まれた死のイメージに耐えきれずに命を落としたのだった。

それが、彼の初めての殺人だった。



ヴィラン『アーティスト』

彼は、幾人もの子供を誘拐し、その血肉を使って絵を描くという猟奇的殺人事件を起こしてきた凶悪なヴィランだ。

彼は世に作品を送り出す際、常にこのような言葉を添えていた。

『真に美しい作品は、真に美しく穢れなきモノからしか生まれない』

これこそがヴィラン『アーティスト』が持つ信条であり、犯行動機であった。

「だから私はこの個性によつて穢れなきモノを画材に変え、それによつて作品を世に生み出してきた」

彼の個性は『画材変質』。その手に触れたものを別の何かを絵具などの画材に変質させる事ができる個性だ。

彼は物心ついた頃からこの個性を使って様々な絵具を生み出し絵を描いてきた。

最初は身近な物を絵具にしていた。鉛筆、消しゴム、落ち葉に埃、色んなものを試した。そして成長していく毎にその芸術に対するこだわりは大きくなつていき、ひたすらに自身の求める芸術アートを求めて描き続けた。

だが彼の芸術は認められなかった。

それでも彼は真の芸術を求めて描き続けた。

その過程で、様々な試みをしてきた。その過程で、道を踏み外していった。

初めの切っ掛けは、いつも自身の芸術活動を邪魔してくる近所の野良猫だった。結果が出なくて焦っていて、何とかしようと画材の準備をしている最中に邪魔をされ、その野良猫を捕まえようとした。咄嗟に動いたのは個性を発動したままの右手だった。

野良猫は、絵具になった。

とんでもない事をしてしまった。最初はそう思った。しかしこれは野良猫で、周りには誰も見ている人はいなくて、誰の迷惑にもなっていない。何より、目の前にできた絵具は今まで見た事のないくらいに素晴らしい物に見えた。この絵具で書けば、自分の思う真の芸術に近付くのではないか？

彼はその欲望に打ち勝つことができず、野良猫から作った絵具で絵を描いた。その結果、今まで描いてきた絵が塵のように思える程の作品ができた。

彼は思った。命ない物から作る絵具よりも命あるモノから作る絵具の方が素晴らしい物ができる、と……。

そこから彼の個性の対象は木の枝や不要物から猫や鳥などの動物へと移っていき、さらに試行錯誤を繰り返すごとに法則を見出していった。

質のいい絵具を生み出すには、知能の高い生き物の方が適している。

魚よりも小鳥の方が、小鳥よりも猫や犬から生み出した方が美しい絵具が入る。

——— だつたら、人間なら ——— ？

…… 悩みに悩んだのち、彼はリストラされたと騒ぎ暴れ酔い潰れた男を絵具にしてみたが、それは醜い絵が出来上がった。

今までの傾向から考えれば、おかしいな結果であつた。

何故こうなつたのか、思考し、試行し、彼は一つの答えを得た。

大人は、醜い。

醜悪な大人からは醜い物しか生み出されない。そう結論付けた。

動物は単純ではあるが純粹である。故に今までは美しい絵具が生み出せたのだろう。

つまり、純粹で穢れない知性体こそ、眞の芸術に相応しい絵具を生み出すのにふさわしい。

そう考えた彼が辿り付いたのが ——— 子供だつた。

「子供は純真だ。穢れなきその在り方は私の生み出す芸術にピッタリだ」

そう考えた彼はもう止まらなかつた。子供を誘拐して絵具に変化させ絵を描く。それは彼の理想の芸術であつた。

「君たちは、真の芸術として永遠に世に残り続けるんだ！」

こうして、ヴィラン『アーティスト』は誕生した。

子供を狙う卑劣なヴィラン、彼がヴィランとして特に優れていたのはその隠蔽能力だ。

彼は子どもを攫っていたにも関わらず、その足取りを全く掴ませなかったのだ。

もしかすると子供で描いた絵を公開しなければ連続誘拐殺人犯^{ヴィラン}『アーティスト』の存在すらもまだに表に出なかったかもしれない。

彼は今日も真の芸術のために子供たちを拉致し、そして――



昔、ウチはヴィランに攫われた事がある。

当時、世間を騒がしていたヴィラン『アーティスト』。子供ばかりを狙って拉致し殺した後にそれを元に描いた絵を公開するという危険なヴィランだ。

当時のウチは特に気にしていなかった。そんなヴィランがいる事は怖いけど、自分とは関係のない所できつとヒーローが何とかしてくれろと思っただけだからだ。

だから、ウチ自身がソイツに捕まってしまっただなんて思いもしなかった。

芸術がどうと講釈を垂れてくるが、そんな事は頭に入つてこなかった。

誘拐され、拘束され、視界も塞がれた。何故か口は塞がれておらず声を出す事は出来たものの、漏れてくるのは恐怖に苛まれて荒くなった呼吸だけ。

少しでも周囲の情報を知りたくて、つい個性のイヤホンジャックを伸ばして地面に突き刺した。

運よく相手には気付かれなかったけど、それから伝わる音でわかったのはそこまで大きくない部屋で自分と犯人らしき大人の他に何人かがいる事。その他の人も足音とか音が聞こえないから、おそらくウチと同じように拘束されているだろうこともわかったけど、それだけだった。

「さて、じゃあ誰から絵具にしようかなあ？」

死を目前とした恐怖心。誰か助けてと願うもあまりの恐怖に声が出ない。地面に刺したイヤホンジャックからも外部からの助けが来る気配は感じ取れない。

きつと、地獄みたいな場所というのとはこんな場所なんだろうとふと頭に浮かんだ。いつその事もう死んだ方がマシかもしれないとさえ思った。

そんな時だった。

「——真に美しい作品は、真に美しく穢れなきモノからしか生まれない。アンタは

「そう言ったな」

……それは、大人の声ではなかった。おそらくウチ以外に捕らわれた子供の一人が発した声だろう。それは間違いないだろう。でも、明らかにおかしかった。だって、この声の子がウチと同じ捕らわれた子供なんだとしたら、どうして……………

「……………ああ、そうさ。それがどうかしたかい？　もしかして共感してくれたのかな？」

「いや、一つ疑問に思つて」

「疑問……………」

「もしそうなら……………」

—— どうして、この子からは聞き取れる心音は、こども落ち着いているのか——
——？

「——アンタ自身は真に美しく穢れなきモノなのか？」

「……………何？」

その言葉に、今まで嬉々としていた男の声から余裕が消えたように感じた。

「もしアンタの持論が正しくて、アンタの作品が真に美しい作品だというのなら、それを

生み出したアンタこそが真に穢れなき存在であるはずだ。そうだろ？」

「……ああ、そうだね。真の芸術のために全てを捧げる私こそ、穢れなき存在の一つだろうや」

「本当に？」

「つ………！ 私は真の芸術を生み出し、それを世に知らしめる事のためだけに活動している！ そのためならばどんな事だつてするし、してきた！ そんな私が、真の芸術を生み出すに相応しくない存在だとしても言いたいのか!？」

「どんな事だつてしてきた、か………！………本当にそうか？」

淡々と紡いでいく拘束された子供の言葉に、自由なはずの男の心臓が早鐘を打ち始める。

「本当に真の芸術を生み出したいだけなら、わざわざ子供を誘拐する必要はない。もつと有効な手段があつたはずだ」

「もつと有効な、手段………だと？」

「理解しているだろう？ 自覚していただろう？ 一番単純な話なんだから」

「何を………何を言っている………!？」

「わからないのか？」

何でもない、当たり前前の事のように、その子はヴィランに対してその方法を口にした。

「簡単な話だ。アンタ自身で、絵を描けばいい」

「——ッ!？」

「真の芸術のために全てを捧げたというのなら、まず捧げるべきはアンタの命のはずだ。なんせアンタ自身穢れなき存在なわけだ。絵具にするには申し分ない、いや、これ以上ない対象のはずだ」

『なのは何故それをしない?』そう問うその子の言葉に、ヴィランは何も答えない。いや、答えられない。何かを言おうとするけど、言うべき言葉が見つけれられない。そんな風を感じた。

そんなヴィランの様子を感じ取っただろうその子はさらに続ける。

「つまり、真の芸術だの言いながらも結局アンタは、自分の身を切る覚悟もない、口先だけの意気地なしなのさ」

「違うッ!! 私はッ!! 私は口だけではっ、意気地なしなどではないッ!!」

激昂したように声を荒げるヴィラン。でもその声からは怒りだけではなく震えも感じられて、男の在り方自体が揺らいでしまっている。

明らかに余裕のない声で叫ぶようなヴィランの反論を、その子供が再び淡々と崩して

いき、そして毒を染み込ませるかのようには言葉で決っていくのだ。

……さつきまでこの場を支配していたのは間違いなくこのヴィランだった。当然だ。ウチらは拘束されて動けるのはコイツだけで、そもそもこの状況を作り出したのはコイツなんだから。

でも、今は違う。

拘束されているウチら。自由に動けるヴィラン。状況は変わっていないはずなのに、既にこの場を支配しているのはもうヴィランじゃない。ウチらと同じく誘拐されたはずの、名前も姿もわからない一人の子どもだ。

捕らわれていたウチにもわかった。このわずかな言葉の応酬によって、もはやヴィランの精神はズタバロになっていた。

ウチは驚愕した。あのどうしようもない程に絶望的だった状況が一変した事に。だけど、ウチの恐怖心は決して消えはしなかった。

先程まで目の前に迫った死に対する恐怖でどうにかなってしまいそうだった。ヴィランから感じる恐怖で自ら死んでしまった方が楽なんじゃないかって思ったくらいだ。だけど、今はそれとは少し違う恐怖を、この子から感じていた。

解らない。どうしてこのヴィランはあの言葉一つでこうも揺らいでしまっているの

か。

解らない。どうしてこの子はこのヴィランの在り方をここまで理解しているのか。

もう、この子どもが既にウチや他の子どもと同じだと思えなかった。

これは、もっと、得体のしれない、悍ましいナニカで——

「さあ、どうする？」

「私は……私は……ッ!!」

……そして、そこからきつと、この空間は本当の地獄に変わったのだろう。

「———それ、頑張れ。アンタの理想の体現まであと少しだ」

そんなささやかな声援と苦悶に震える男の漏れる声が、その空間を支配し続けた。

……その後、ヒーローが監禁場所にたどり着いた時、そこにあつたのは拘束され恐怖に怯える子供たちの姿と、悍ましい絵の描かれた血塗られたキャンパスの前で息絶えたヴィランの姿だった、らしい。

ウチは救出された後両親の元へ返されて、後日警察の事情聴取を受けた。

ウチがどうやって攫われたのか、攫われた後どんな扱いをされたか、そしてヴィランがどうして死んだのか。

ウチはあの時の子が一体どんなヤツなのか気になった。けど個人情報保護とかの色々な問題のせいで結局他の誘拐された子どもたちとは会う事はできなかった。

……正直、ヴィランは怖い。実際に誘拐されて、殺されそうになったんだ。その恐怖はすぐに消えるものじゃない。癒えるまで時間が掛かる。

でもそれ以上に、あの子の在り方が恐ろしかった。

あの子に助けてもらったのは確かだ。でも、同時にヴィラン以上に恐怖を感じたのも

確かだ。

ヴィランに対しての恐怖はわかる。ウチ自身や大切な人が危険にさらされる事から来るものだ。

でもあの子への恐怖は違う。ウチに危害が来たわけじゃない。それでも、あんな自ら命を絶つように相手を論ず考え方と実際にそうさせる事ができた能力……ウチには全く理解できなかった。

理解できない恐怖は心の中で燻り続けている。この恐怖を時間は決して癒してくれない。

ならあの在り方を理解したい。理解しなきゃ、この恐怖はずっと心に残り続けるだろう。

でも、どうすれば再びあの子に巡り合えるだろうか。そう考えて、あの時の言動を元にウチなりに考えてみた。

あれがウチらを助けるための行動ならば、やり方はともかくあの子は正義感の強い人間という事だ。つまり、ヒーローを目指してもおかしくはないだろう。

あれがヴィランを死なせるための行動ならば、この先もきつとあの子は同じように人を死なせ続けるだろう。つまり、ヴィランに墜ちてしまう可能性は十分にある。

そのどちらにも関わり合える道は……そう考えた時、一つの答えが出た。

だからこそ、ウチはヒーローに――



俺は絶望の中で最後の希望であった彼の名を呼んだ。どこだろうと助けの声を上げれば駆けつけると言ってくれた、最高のヒーローの名を。

……彼は、来なかった。俺の中のヒーロー像は完全に崩れ落ちた。

「――何やら、気に入らない奴の名前が聞こえたから来てみたけど、どういう状況なのかなこれは？」

そうして最後の希望であったヒーローに失望し、絶望しか抱けなくなった俺は、しかしヴィランによって救われた。

夢の中で俺を殺しに来たヤツをあつさり一蹴した彼の事を、俺はヒーローだと思っただが、彼はそれを否定した。

己は正真正銘ヴィランであると。

そんなヴィランを名乗る彼はこの状況が珍しいのか、あるいは単なる気紛れか、俺の身の上話を聞いてくれた。

「成程……毎夜毎夜ヴィランに殺される夢を見る、か……面白い個性だね」

「……疑わないの?」

「個性は個性と一括りにされるがその幅は多岐に渡る。君のそれは夢の中で人の意識とリンクする個性なんだろうさ。個性のオンオフができない上にその相手がヴィラン、それも殺人者に限るといふ辺り悪辣だがね」

さすがの僕も欲しいとは思わないね、と軽く微笑む彼に、つつい弱音と共に涙がぼろぼろと漏れてしまう。

「逃げてでも誰かが殺しにくるんだ……もう、嫌なんだ。何度も何度も殺されて殺されて……」

「そこまでの境遇だと『いつそのこと死んだ方がいい』なんて考えが浮かんできそうなものだけだ」

「何で? 死ぬのが嫌なのに何で死のうなんて思うの……?」

「ああ、そうか。君は死が救いじゃないと体験しているんだっただね。他の誰よりもずっと死について詳しいわけだ」

「よくわからないけど、死ぬのは嫌だよ……」

「ふむ……。残念だけど僕には君をどうしようもできないし、どうする気もない。守るつもりもなければわざわざ君を殺すつもりもない。だけど一つだけ、助言のような事くらいはしてあげよう」

「助言……?」

「これをすれば、少なくともただ殺されるだけの夢じゃなくなるのは確かだね」

「本当!? 何をすればいいの!?!」

「それはね………」

俺は、その彼の言葉が希望になると信じて、耳を傾けた。

「——キミがその相手を殺してしまえばいいのさ」

そして彼は、あつさりど、なんでもないようにそう言った。

「え……でも人を殺すのはダメな事じゃ……」

「おいおい、殺人者サイランに殺しの善悪を説くのはどうかと思うよ。そもそも、相手が君を殺し

に來ているのなら逆に君が相手を殺し返したところで文句はないだろうさ。そもそも相手は殺人鬼だ。気にする必要もないだろう」

「そうなのだろうか……子供ながらにそう思ったりもしたが、同時に確かにとも思ってしまった。こちらを殺しに來ているのだから、殺し返されても文句を言われる筋合いはないはずだ。」

「問題点があるとすれば、子供の君が大人のヴィランを殺そうとするのは大変だつて事くらいだね。だがそれも大した問題ではないだろう。君は大きな武器を持っているんだからね」

「武器？　武器なんて持つてないよ。個性もこの夢以外にあるわけじゃないし……」

「人間つてのは意外と死なない事もあるけど、案外あっさり死ぬものなんだ。どうすれば人は死ぬのか、どこまでなら死なずに済むのか。それを君は実際に体験して誰よりも知っているはずだ。死への理解。それは大きなアドバンテージだよ」

これが、俺と彼——先生との出会いであり、別れであった。

……次の日、彼は夢の中で彼を殺しに來たヤツを殺し返した。その日、彼は殺されなかつた。



「……なんだこゝ……？」

気が付けば俺は見覚えのない場所に立っていた。

自分の足でここに来た覚えもない。かといって黒霧のヤツがここにワープゲートに開けたわけでもなさそうだ。

訳の分からない展開に苛立ちが湧き上がる。思わず首筋辺りをガリガリと掻き筆ろうとした時、声が聞こえてきた。

「———やあ弔。こうして顔を合わせるのは久しぶりだね」

「……先生っ!？」

そこにいたのは、俺の恩師である『先生』だった。

「急にすまないね。実は今日は君に紹介しておきたい人物がいるからここに来てもらったんだ」

「俺に紹介したい奴……？ いや、そもそもどこだよこゝ？」

そうだ。まず場所の説明をしてほしい。先生が連れてきたのはわかるが、いくら何でも訳が分からなすぎる。

「ここは、言うなれば人の無意識、夢の中の世界。今、現実の君や私は眠っているのさ」「夢の世界……この世界を先生の個性で作り上げたのか？」

「いや。この世界自体は彼の個性によるものさ。僕はそれとはまた別の個性でそれに相乗りしているだけさ」

つまり、単独でこの不可思議な世界を生み出せる個性持ちって事か……額面だけ見れば強キャラのように思えるな。

「で、どんなヤツなんだよソイツ」

「彼は今警察の中で密かに噂されている連続殺人鬼メーカーだ」

「連続殺人鬼、メーカー？」

「人の心に働きかけて、ヴィランに変えてしまう。そういう個性を持っているのさ」「つまり、洗脳してるって事か？」

「——正確には違うな。私がしているのはあくまで思考誘導にすぎない」

ちょうどその時、俺と先生以外の声がこの場に響いてきた。

「その人が持つ本質・欲求……それを呼び覚ましているに過ぎない。この夢の世界もそのための舞台だと思つてつくればいい」

声の主に視線を向けると、ソイツは絵に描いたような紳士の格好をしていた。シルクハットをかぶり、気取つたようにその手に持つステッキをくるくると回していて俺たちの前に姿を現した。

「コイツが……」

「そう、彼が僕の協力者の一人、連続殺人鬼メーカーその人さ。ドクターの脳無と比べると戦力としては落ちるだろうけど、どこにでもいる誰かが急に殺人鬼ヴィランになるといふ辺り、社会的な衝撃は強くなるだろう。上手く使えば君の目的にも役立つと思うよ、弔」

「……なるほどね。つまり手駒作りに最適つてわけ、だ」

手駒を増やして雑兵として使うもアリ。突発的にヴィランにして暴れさせて攪乱するもアリ。ゲームのやり方が増えたってトコだな。

「先に一つ断つておくが、私は君の下に付くわけではない」

「……ああ？」

「あくまで私の事を君に紹介してもらつたのは私の目的を達成するために君と足並みを揃える事がプラスに働くと考えただけの事。決して君の思想や考えに同調したわけではない」

「何が言いたいんだお前？」

「……簡単に言えば、互いに利用し合おうという事だ。仲間や同士ではなく、あくまでビジネスパートナーに過ぎないという事だ」

小難しい事ばかり言う奴だ。気に食わない。けど、先生の紹介だ。全くの無能ではないんだろう。

なら使えるだけ使わせてもらおう。コイツ自身も言っていた事だしな。お言葉に甘えて利用できるだけ利用してやろうじゃないか……。

「わかったよ。せいぜい仲良くやろうじゃないか……で、名前は？俺はお前を何て呼べばいいんだ？ステッキ野郎か？ジェントルマンとでも呼べばいいのか？」

心の籠っていない俺の軽口に特に反応するわけでもなく、つまらない態度でヤツはこう名乗った。

「——『ジョン・ウォーカー』。警察はそう呼んでいる」